

城き殿どの町ちょう

本薬師寺法灯が奈良へ

城殿（きどの）町の一帯は、古代から中世にかけて「喜殿」と、江戸時代に入って「木殿」と呼ばれていました。

古代すでに興福寺や東大寺の支配地が置かれ、中世にも藤原一族（摂関家）の領地があつたなど、この地を取り巻く記録が数々の古文書に登場します。とにかく古くから開けた土地だったことは、まず間違いありません。

近鉄畝傍御陵前駅東約五〇〇メートルの同町内に、奈良・薬師寺の前身といわれる「特別史跡・本薬師寺跡」があります。日本書紀によりますと天武天皇が、皇后（のちの持統天皇）の「病氣平癒（ゆ）を願って天武九（六八一）年に創建」したのが、この寺です。

寺は、平城遷都に伴って「養老二（七一八）年平城右京に移」（薬師寺縁起）り、法灯が現在の奈良・薬師寺に継がれたようです。江戸時代の旅行案内書（大和志）に「薬師廃寺、在木殿村、礎石尚存」との記録が残っています。

市教育委員会の本格的な発掘調査が平成二年から実施され、東・西の塔や金堂など廃寺「本薬師寺」の遺構が次から次と地中から姿を現し、目を見張る数々の大きな礎石も掘り出されました。